

富士に祈る 75

國學院大學兼任講師 城崎 陽子

信仰と伝承 ―七富士参り・登拝行―

先回は、富士山の開山祭を取り上げ、その祭祀の様子を記した。今回は、「御山開き」を迎えた富士山に関わる行事の中から、「七富士参り」と「登拝」を取り上げて記す。

「御山開き」と同時に、各地で富士山に関わる行事が行われる。「七富士参り」はその一つである。例として、高田藤四郎の流れを汲む丸藤宮元講の「七富士参り」を、平成二十八年調査の事例を中心にみてみたい。宮元講では、毎年七月一日に七富士参りを行う。先代の井田清重（藤行清山）先達（平成十九年没）までは六月三十日に北口本宮富士浅間神社開山前夜祭に参加していたが、現在は七月一日の行事のみ行っ

ている。

七月一日当日、午前十一時に宮元講の先達宅に集まり、「行衣」に着替える。そのまま昼食をとり、正午には自家用車に分乗して出発する。初めに高田藤四郎（日行青山）の墓所のある「宝泉寺」（新宿区西早稲田）に参詣する。次に二代目高田藤四郎の墓所である「緑雲寺」（新宿区原町）に参詣する。なお、道路の拡幅工事によって、緑雲寺は大きく墓所を削り取られる形となったが、二代目の墓所はそのまま残されている。続いて、足立区千住大町の氷川神社境内にある富士塚を参拝し、「拝み」をあげる。当該の地域には丸藤の枝が氷川神社の氏子組織と



浅草富士浅間神社の新たな富士塚

重なることで現在も講社の組織をとどめている。午後二時半ごろから御飯屋で祭典も行われる。次に、小野照崎神社の境内にある富士塚（台東区下谷）を参拝する。御飯屋の前で「拝み」を行い、掛け念仏をかけながら富士塚に登る。続いて浅草富士浅間神社（台東区浅

草）に参拝する。ここには本年の開山祭にあわせ境内に高さ二メートル余りの富士塚が築造されていた。例年になく参拝者が多かったのは、開山祭限定の御朱印と、新富士塚のためかと推測される。そして、最後に駒込富士神社（文京区本駒込）に参拝する。当社は

「駒込富士」と呼ばれる富士塚があり、江戸の富士講の崇敬を集めていた社でもある。社殿は富士塚の山頂に位置し、傍らでは「麦わら蛇」と呼ばれる蛇体の縁起物が売られていた。当該の縁起物は火難・水難除けとしても知られ、水回り（台所）に吊るしておくとい

される。再び先達宅へ帰った講員は「行衣」を解き、直会を行って解散となる。

宮元講の「七富士参り」において目的とされているのは、講に由来する寺社を回ることであり、「枝講」とされる由縁の講社との友好を深めるためでもある。「七富士参り」の「七」が実数ではないことも行程を見る限り明らかである。他の例をあげてみよう。丸金神奈川講（神奈川県東神奈川）の七富士参りは、神奈川の熊野堂、小机の富士塚、東本郷の富士塚、菅田の熊野堂、菅田町中村の富士塚、羽沢の富士塚の六カ所を順番に巡り、最後に芝生の浅間神社を参拝するという順序で行われていた。これらの参拝場所は、かつてそれぞれに講が存在しており、互いの講社が誘いあつて回り始めたという。各講によって回る順番や場所に多少の異同が見られるものの、最後に浅間神社

を参拝するという共通点が見られたという。丸金神奈川講の「独り先達」として最後まで七富士参りをしていった岩岡春吉氏（故人）からは、七富士参りの道々、畑の作物をおやつとして分けてもらいながら「ピクニックのような気分」で七富士参りをしていったと聞いている。

富士信仰最大の行で、各講社で行われるのが「富士登拝」である。これも、丸藤宮元講を例にとってみよう。「登拝」に先だつて、「立ち拝み」と称される講中の安全祈願が行われる。「お焚き上げ」を行い、その炎に登拝に着用する「行衣」をかざして安全を祈る。登拝のルートについては、現在は北口本宮富士浅間神社にて登拝安全の祈願をした後、スパルラインを上り、五合目の小御嶽神社へ参拝の後、北口登山道を登り、再び小御嶽神社まで帰ってくるというルートである。講社に

よつては、登拝途中に八大龍王を祀る「亀岩」や身禄入定の地である「烏帽子岩」といった聖蹟を拝しつつ登る場合もある。宮元講は八合目の元祖室（烏帽子岩）で一泊、翌朝の御来光を拝し登頂する。ちなみに、富士講で登拝する際、御来光を頂上で拝することはない。これは、御来光は「見下ろす」ものではなく、「いただく」ものだからだとされ、八合目から九合目の鳥居までのあたりで拝するのだという。登頂すると、山頂を一周する「お鉢巡り」を行い、「釈迦の割石」や「金名水」「銀名水」などを拝して下山し、翌日に船津胎内を参拝する。「胎内行」も講社によるが、由縁の胎内を拝する。扶桑教の登拝では「人穴」に参拝する。なお、「金名水」「銀名水」

はいわゆる霊水であり、この水で沸かした茶を飲むと長命を得るとされ、また「お焚き上げ」の際の「焚き符」や御師の頒

布する「ふせぎ」はこの霊水を用いて書くという。また、登拝に際して、吹く「風」は「御山の御息」、雨は「御山の御垂（汗とも涙ともいふ）」と称する。富士山を擬人化した、崇敬する気持ちを持たせることは富士信仰の民衆教化の一面でもある。

ところで、各講社の記録を紐解くと、下山の途中に「中道修業」を行う人々がいたことがわかっていて、五合目を一周する、いわゆる「お中道」と呼ばれる「行」で、富士講では「先達修行」と

位置付けられている。小御嶽神社で「御許し」を戴き、再び小御嶽神社までたどり着いた後、「お中道」で使った杖を封印するのだ。先達となる資格は、「登拝三回、お中道三回」とされるが、これも「登拝七回、お中道三回」等講社によって異なる。大沢崩れが通行止めになった昭和三十年代から「お中道」は廻れなくなつたので、この資格を満たすことは不可能になつており、現在は登拝の回数で判断されるようである。



富士山上で御来光を拝す